

日本の海岸線を歩く会 歩行報告書

報告者 横山泰一・弥生

1. 概 要

歩行名称	東北東
歩行区間詳細	スタート地点: 万石橋
	ゴール地点: 鮎川港
実施期間	2026 年 5 月 20 日 ~ 23 日
全歩行距離	45 km

2. メンバー表

No.	役割・分担	氏 名	年齢	歩行日数	備 考
1	リーダー	横山泰一	13 期	4	
2		横山弥生	13 期	4	
3		蔵田道子	15 期	4	
4					
5					

3. 歩行の概要

	月日	出発地 ~ 到着地	歩行距離	歩行参加者	備 考
1	5/20	渡波(万石橋)~蛤浜	12.4km	横山泰一、弥生、蔵田	
2	5/21	鮎川港~給分	6.0km	同上	
3	5/22	給分~竹浜漁港	12.5km	同上	
4	5/23	蛤浜~竹浜漁港	14.2km	同上	
5					
6					
7					

4. 費用 (泰一の場合)

交通費 JR 運賃 17,340 円

レンタカー代 32,820 円 $\div$ 3=10,940 円ガソリン代 2,533 円 $\div$ 3=844 円

宿泊費 後山荘 2泊 22,000 円、 瑞幸 1泊 8,700 円

飲食費 4,600 円 (内訳 後山荘のアルコール代 2,700 円、コンビニのパンと牛乳等 1,000 円、ラーメン 900 円)

おしかホエールランド、鯨博物館の入場券 400 円 コーヒー代 340 円

合計 65,200 円

5. 歩行の詳細



前回歩行した JR 渡波駅近くの万石橋からスタートし、レンタカーを伴走させ、数キロ単位で運転を交代しながら鮎川港を目指した。運転者は観光しながら、歩行者のペースに合わせて、中継地点で交代することにした。

5月20日

渡波（万石橋）→ 蛤浜 12.4km

東北新幹線はやぶさ 5 号（東京駅 8:18 発）で 9:48 に仙台着。さらに、仙石線に乗り継ぎ（10:18 発）、石巻駅に着く（11:18）。昼食の後、レンタカーを借り、三人が乗車し、前回歩行の通過地点である万石橋まで走る。そこから泰一が歩き始める（12:40）。弥生・蔵田は車でサン・ファン館を訪れ、改めて支倉常長率いる慶長遣欧使節団に想いを馳せた。

泰一の歩行は県道 2 号から分かれて小竹浜へ向かう 1 車線の道路に行く。車はたまに通るくらいで、所々、海を見ながら気持ち良く歩く。眼下にサン・ファン館の敷地に置かれたサン・ファン・パウティスタ号が見えた。写真を撮り忘れて石巻市観光協会の HP の写真を拝借した。道路脇の斜面のマルバダケブキの花が綺麗だ。



万石橋（橋の向こう側が渡波駅）



渡波湾の眺め



サン・ファン・バウティスタ号（石巻市観光協会 HP より）



マルバダケブキの群生



尾崎神社付近から石巻湾の眺め



車と合流地点

小竹浜に向かう途中の尾崎神社付近で車が待っていて、ここで歩行を交代（13:40）。泰一・蔵田は車で小竹浜漁港へ。
ここからは、弥生が小竹浜漁港まで歩く。道は大きく蛇行し、藤の花を見上げながらの道を行く。浜が近くなると海が見え始め、さらに浜に降りる長い階段が目に入る。迷いつつも、その階段を横目に見て歩き、漁港に至る。



小竹浜漁港



日枝神社

小竹浜漁港から蔵田が歩き始めた（14:00）。やがて弥生が到着し（14:10）、蔵田の後を追う。
泰一は漁港と日枝神社を見物した後、車で折浜へ向かった。

蔵田に追いついた弥生は、二人一緒に左右を森に囲まれた道歩く。行く道のあちこちに、木々に絡んだ藤が空高くから地上近くまで花を咲かせていた。これまでに見たことのない藤の祭典だった。リアス式海岸特有の急な登り下りを経て、折浜に到着（15:20）。



小竹浜と折浜の間の峠を登る二人



藤の花

車で折浜に到着した泰一は、漁港と牡蠣養殖作業を見物した。牡蠣の稚貝を付着させた帆立貝の殻が整然と並ぶ。乾いた牡蠣の稚貝を海へ浸す作業をしていた。陽に当てて貝を開閉させて稚貝を鍛える「抑制」作業だそうだ。二人の到着を待って、泰一が折浜から蛤浜に向けて歩行を開始する。



折浜漁港



稚貝を網に乗せて海へ降ろす作業



牡蠣の稚貝がびっしりと着いたホタテの貝殻



蛤浜へ向かう泰一

車組は、折浜で少し休む。看板には、同地が函館へ向かう榎本武揚の艦隊の集結地である旨の記述があった。弥生は養殖場の写真を撮り、蔵田はそれに付き合わされる。そして、蛤浜に先行。

泰一が蛤浜に到着し、この日の歩行を終了した（15：45）。ここから車で給分（きゅうぶん）の民宿へ向かった。



榎本武揚艦隊集結地の看板



運転交代（折浜）



蛤浜バス停



運転交代地点（蛤浜）



蛤浜



蛤浜

民宿は、東日本大震災後の2013年に建てられ、自動消灯設備が整い、ある意味現代的な宿で、弥生は驚いていた。宿の女将さんから、外国からの「みちのく潮風トレイル」歩行者がとて多いとの話にも驚いた。今回は一人も合わなかったが。

民宿の料理は、もちろん魚料理で、突出しに出てきたホヤとナマコは絶品でした。大きな茹でたホタルイカが添えられ

ていた。ホタルイカまで石巻が代表的な産地とは知らなかった。ワカメのしゃぶしゃぶはお湯に通した瞬間に鮮やかな緑色に変わるのに感激した。ヒラメ・ホタテ・マグロ・エビなどの舟盛り、牡蠣フライなどと豪華で、三人とも全部は食べきれなかった。



ワカメのしゃぶしゃぶ



舟盛り（3人前）



カキフライ

5月21日

給分 → 十八成浜手前 ← 鮎川港 6km

朝から雨。天気予報によれば、次第に雨は強くなり、午後3時頃ようやく雨は止み曇りとなるらしい。

今日は、前日の地点まで戻り、県道2号を歩く予定だった。しかし、雨の中、歩道もなく大型トラックも走る山道は危険なので予定を変更し、宿近くの給分のファミリーマートから鮎川港を目指す。ファミリーマートから泰一が歩き出す(8:30)。だが、予報通り雨風が強くなり、雨と強風にあおられて傘もさせず、十八成浜手前で車に逃げ込む(8:45)。

雨風は弱まる気配がなく、歩行には適さないので、車で鮎川港の「おしかホエールランド」に避難した(9:00頃)。ここには観光物産交流施設、牡鹿半島ビジターセンターおよび鯨博物館とも言えるおしかホエールランドがある。ふと観光船の切符売り場を見ると、一枚の張り紙が金華山行き船の欠航を知らせていた。

雨の収まるのを待ちつつ、館内の展示を見学。牡鹿半島の自然と共にある生活、そして鮎川の捕鯨の歴史を知る良い機会だった。また、鯨の歯で作られたアクセサリ等は、あたかも象牙作品のようでびっくり、でも納得した。この施設のおかげで約6時間暇を潰すことができた。



出発地点のファミマを振り返って撮影



おしかホエールランドの捕鯨船（展示船）



おしかホエールランド内部



鯨歯工芸品の店



孫への土産を買う



マッコウクジラの骨格標本



展示を興味深く見る

15時になると雨が少し弱まる。泰一が給分へ歩き出したが、雨風は再度強くなる。カップを着て、2号線から金華山道に入る。金華山とは逆方向に歩き、やがて2号線に出て、鮎川小学校前で、先回りしていた車と合流（15時30分）。



金華山道



一部階段がある



県道2号に停車した車



白山神社

ここから弥生・蔵田組が歩き出す。依然として雨が降り続く。ところどころ強風に煽られるが、総じて問題はなかった。いつもは下から見上げていたキリやホウノキの花を間近に見たりして楽しんで歩けた。また、下り坂からは十八成浜を見下ろすことができた。この浜近くには、多くの民家が見えた。

泰一は車で白山神社を見学し、十八成（くぐなり）浜へ。弥生・蔵田組が十八成浜到着（16：00）。

蔵田は乗車し、弥生は続けて歩く。今朝歩行を諦めた地点に到着（16：30）し、今日の歩行を終了した。車で昨日宿泊した宿へ向かい、17時に到着した。



弥生到着

2泊目となる宿の料理は、ワタリガニと付き出し、カワハギとマグロなどの刺身の盛り合わせ、マグロ焼きと生牡蠣、白身魚のフライ、メバルの唐揚げなど、またまた豪華で量も多かった。今日も完食できなかった。



5月22日

給分 → 竹浜漁港 12.5km

今日も雨模様だが、出発時には止んでいた。

さて、朝は、まず宿近くの十一面観音堂に向かう。ここには国の重要文化財の木造十一面観音像が納められているが、見学を予約しておらず、外からその姿を想像することとした。この像は、鎌倉時代に奥州藤原氏の守り本尊だったが、源頼朝に攻められた折りに、四代泰衡が衣川に流し、ここ表浜に流れ着いたものと伝えられている。

宿は浜から急坂を登った坂の途中にあるが、観音堂は宿の少し上にある。宿からも浜が見えるが、ここからは表浜全体が見渡せる。他の浜と同様に、浜は急峻な斜面に取り囲まれている。そして、2011年の東日本大震災の津波で流された後

に建てられた家々が高台に見える。



十一面観音堂入口



十一面観音堂



お堂からの表浜港

その後、車でファミリーマート牡鹿店へ移動し、昼飯を調達してから、泰一が、カップを着て県道2号を昨日とは逆方向である北に向かい歩き出す(9:30)。雨がパラパラと降り出す。県道2号から小網倉浜への道に入り(10時30分)、やがて堤防に出た。今回初めて堤防上を歩く(10:42)。堤防の上を歩ける唯一の機会だった。雨がだんだんと強くなり、10時56分小網倉浜漁港で車と合流した。

車組は、リアス式海岸のへりに行く道路を小網倉浜海岸まで行く。道路から浜が見えてくるとすぐに続いて高い防潮堤が見えるというのが、東日本大震災後の東北の海岸である。清水田浜では防潮堤の階段を見つけ、海を眺めた。小網倉浜漁港は、漁港に続く平地もそれなりに広く、それなりの数の家があったのだろう。津波に襲われて15年後の今は、牡蠣養殖から出る貝殻置き場と雑草の原となっている。帰宅後調べると、石巻市の公式統計によれば、小網倉浜の人口・世帯数は、震災前:226人56世帯、現在:5名~7名となっている。復興を待ちきれず、他地域からの通いとなっているようだ。



出発地点のファミリーマートにて



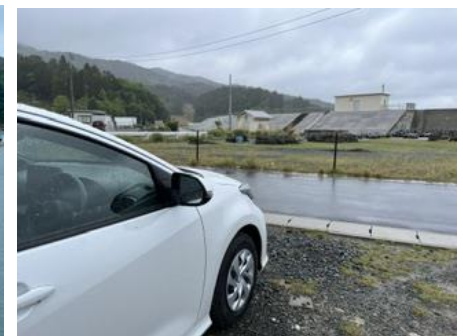
県道脇のトチノキ(清水田浜)



堤防上を歩く(清水田浜)



小網倉浜漁港



小網倉浜漁港の駐車場

さらに雨は強くなり、様子を見る。やがて少し雨が弱まったので弥生・蔵田が歩き出す(11:25)。気温10℃。雨風は場所によって強さが異なる。海からの風が通り過ぎるところは強風に煽られる。相変わらずのリアス海岸のへりの道を行

く。藤はあらゆるところに咲いている。

泰一は車を運転し鹿立（すだち）バス停で待つ。二人が到着（12：30）。

雨が続く、気温は9℃と寒い。車の暖房を入れて体を温めた。3人は車で狐崎浜へ向かい、雨に煙る海を見ながら車の中で昼食を食べた（13：10）。



小網浜漁港から歩く



小さな峠を越える

14時00分、車で鹿立（すだち）バス停に戻り、弥生・蔵田組が歩き出す。雨は止んだが寒い（10℃）。泰一は車で狐崎浜へ戻り、写真を撮った。その後狐崎漁港へ戻り二人の到着を待った。弥生・蔵田組が到着（15：11）。

交代で、直ちに泰一が歩き出す。竹浜団地（復興住宅）を経て（16：04）、竹浜漁港到着（16：13）。今日の歩行を終了した。車で桃浦にある宿に到着（16：50）。



狐崎浜で昼食



ここから歩く鹿立バス停にて



狐崎浜



狐崎漁港



蔵田・弥生組が狐崎漁港に到着



竹浜団地



竹浜漁港



宿からの夕日



久しぶりの青空

5月23日

蛤浜 → 竹浜漁港 14.2km

天気予報では晴れるはずだが、雲が多く、寒い。気温 10℃。

夜中に消防自動車と救急車のサイレンで目が覚めた。泰一が窓から外を見ると救急車からストレッチャーが下されると

ころだった。蔵田は2台の消防自動車とパトカーを発見。それ以外は、宿は静かで、火災が起きている気配がない。不安ながらも寝てしまった。朝食時に宿の女将さんに話を聞くと、車が崖から落ちたという。朝、レッカー車が来て引上げ作業が始まった。車が引き上げられる前に宿を出たのが少し残念だった（8時20分）。



宿の前で

初日の歩行終了地点の蛤浜バス停に車で行き、泰一が歩き出す（8時30分）。やがて県道2号に出て、泊まった宿・瑞幸の前を通り桃浦入口で県道2号から別れた。そこで車で移動してきた蔵田が歩行に参加した（9時10分）。二人で桃浦漁港まで歩き、弥生の運転する車と合流した（9時18分）。その後、牡蠣の養殖作業を見物した。

牡蠣の稚貝の付着したホタテの貝殻をよじった2本のロープに一定の間隔で挟み、さらに機械でロープをよじって固定する。その後、海へ入れ、潮の干満を利用して、初日に折浜で見た抑制作業で鍛えるらしい。プランクトンが豊富なリアス式海岸は牡蠣養殖に適している。一年育てた牡蠣は真水の水槽に一晩浸して浄化してから出荷される。桃浦漁港では、宮城県の復興政策を踏まえ、漁業協同組合員の一部が合資会社を作り、漁業権を得て、養殖とともに6次産業化を図っている。



蛤浜バス停を出発



桃浦漁港入口



桃浦漁港



作業を見学



種はさみの作業



真水の水槽に一晩浸して滅菌してから出荷

桃浦漁港からは弥生・蔵田組が歩き出す（9：25）。漁港を出ると、防波堤のあまりの高さを実感しつつ、堤に沿って2号線への合流地点へと歩く。左側の土地は盛り土をする旨書かれ、復興途中なのだろうか。2号線を登って行くと、桃浦漁港とその先の海が見渡せ、それを過ぎると月浦までは、いつも通りの浦と浦を結ぶ道であるが、今日は雨も降らず、快適に歩ける。

泰一は車で月浦へ向かう。月浦に到着（9：45）して周辺を観光しながら、歩行組を待つ。月浦には、支倉常長像があり、眼下に出帆していった月浦が見える。一行が乗った様式帆船サン・ファン・パウティスタ号はこの浦で建造され、出航したとのことだ。この船は太平洋を渡りメキシコまで行ったが、ヨーロッパへはスペイン船で渡ったことなどがわかって面白かった。10時30分歩行組（弥生・蔵田）が到着。



桃浦漁港の堤防脇



支倉常長の銅像の下で



眼下の月浦と仙台湾の眺め

弥生はそのまま萩浜へ向けて歩く。2号線はリアス式海岸の上を通り、侍浜のバス停を通過する。そばには、萩浜中学校

閉校の碑が建つ。しばらく海に沿って行くが途中から内陸に入る。さらに歩いて下って行くと視界は開け、荻浜漁港に出る。

車組は荻浜 10 時 50 分頃に到着し、羽山姫神社、石川啄木歌碑、宮城新昌顕彰碑を見物。羽山姫神社は階段が多く、登るのを諦めて、啄木歌碑を見に行った。歌碑には、「港町 とろろとなきて 輪を描く 鳶を圧せる 潮曇りかな」とある。啄木が荻浜をいとしんで回想して歌ったものと書かれている。よほどこの地が気に入ったようだ。明治中頃には横浜＝荻浜＝函館の定期船航路があり、東京や千葉方面からの移住者が増え戸数 170 余りに栄えたようだ。その後東北本線の開通や船の大型化により荻浜は使われなくなっていったようだ。

次に宮城新昌顕彰碑を見にいった。宮城新昌（1884 年沖縄生まれ）は、米国で牡蠣養殖に携わり、帰国後日本中を探し回って牡蠣養殖の最適地として万石浦を見つけ、自ら考案した「垂下式養殖」を始めた。彼は世界の牡蠣王と呼ばれ、この顕彰碑が荻浜漁港に 1979 年に建立された。2010 年には、次女の岸朝子により牡蠣をイメージしたメッセージプレートが設置された。共に、2011 年の東日本大震災で被災し、2013 年 10 月に現在の場所に再建された。ちなみに、岸麻子は食ジャーナリストとして活躍された方で、東京府立第三高等女学校（現都立駒場高校）を卒業後、1942 年女子栄養学園（現日本栄養大学）を卒業した方です。弥生の母と第三高女時代に同級生と思われ、面白く思った。11 時 14 分、弥生到着。



羽山姫神社



宮城新昌顕彰碑



メッセージプレート

荻浜から泰一が歩き出す（11 時 15 分）。小積浜バス停を通過（11：36）し、やがて右折して牧浜への道を進む。庚申塚に並んで昭和 8 年の昭和三陸津波の碑が建っているのを発見する。この碑には「地震があったら津波の用心、忘れるな火の元の注意、先に老幼続いて避難第一」と刻まれている。お参りして先を急ぐ。小積（こづみ）浜を過ぎると長い登り坂となり、途中で車と合流した（11 時 56 分）。

ここから弥生・蔵田組が歩き始める。山道から降りてくると、そこは海に向けて開かれ、こちら側と向かい側の陸に囲まれ、その中に牡蠣の養殖場と漁船が浮かぶ穏やかな海。陸と海を堤防に遮断された漁港と異なる風景にほっとする。その風景に癒されながら、漁港へと向かい、その後再び急坂を登る。途中、津波の襲来位置とその上の復興住宅団地の看板が見える。そして廃校となった小学校とその旨が書かれた掲示板が続く。バス停は残されている。

泰一は車で先回り、牧浜で写真を撮影し（12 時 10 分）、ゴールの竹浜漁港で二人の到着を待った。13 時二人が到着し、歩行を終了した。



荻浜から歩く



小積浜のお地藏さん



小積浜の庚申塚と津波の碑（右端）



牧浜への上り坂



牧浜の牡蠣養殖場

今回歩いた海岸線の浦を国土地理院 25000 分の 1 の地図で拾い上げた。「浜」又は「浦」が付く地名は、北から、小竹浜、折浜、蛤浜、桃浦、月浦、侍浜、荻浜、小積浜、牧浜、竹浜、狐崎浜、福貴浦、小網倉浜、清水田浜、大原浜、給分浜、表浜、(小湊浜)、白浜、十八成浜、鮎川浜の 21 ある。このうち小湊浜だけは通過していないので（ ）をつけたが、20ヶ所ほぼ全ての浜を歩くなり見る事ができた。50km 弱の海岸線にこれだけの数の浜がある所は少ないのではないだろうか。その意味でも今回の歩行は面白かった。



牧浜に行く



竹浜漁港



竹浜漁港で歩行終了



記念写真

感想

前回の歩行は 2024 年 4 月に石巻市万石浦を一周して JR 渡波駅で終了した。今回は万石橋からスタートして、海岸線を鮎川港まで歩いた。あいにく雨風と低温に悩まされ、予備日まで使って、歩き終えた。今回はレンタカーを伴走させ、ほぼ空身で歩けたのが良かった。

一番の印象は、どの浦にも小さな漁港があり、牡蠣を養殖していることだ。仙台湾に面して、北上川からの森のミネラルと豊富なプランクトンに恵まれた穏やかな海がある。中でも前回歩いた万石浦は種牡蠣の採苗に適し、世界の食用牡蠣の 80% は石巻ルーツと言われている。日本中を探して牡蠣養殖の最適地としてこの地を見つけ、垂下式養殖法を考案した沖縄出身の宮城新昌の顕彰碑が見られてよかった。

リアス式海岸の浦と浦との間は峠を越えることになるが、周りは森だが所々海が見下ろせる。フジ、キリそれにホオノキの花が咲き、足下にはマルバダケブキやヒトリシズカの花、花が終わったマムシグサなどが目を楽しませてくれた。しかし不法投棄が目立った。大きな家電からペットボトルまで。日本の海岸線を歩いて、いつも感じるのだが、この綺麗な自然にゴミを捨てる気持ちはわからない。(泰一)

雨の中を歩かないと仰っていたので、雨天が予想されていてどうされるかと思っていました。予備日を使って、雨の中あまり歩かずに予定通り歩いて良かったです。

レンタカーを使って行動したのも便利で、安心感があり良かったです。2グループ同時に行動しなくても、歩ける距離を設定されたのも、二人で歩いて良かったです。サンファン館、鯨の博物館、牡蠣の養殖に関する事、色々初めて知る事も興味深かったです。

牡蠣と言えば、食べず嫌いできていたのですが、今回宿で食べたのが意外においしく感じ、これからは、食べず嫌い、はやめようと思いました。宿もコスパ良く、リーズナブルでしたね。全体的に、余裕がある計画で満足しました。(蔵田)

今回の歩行は雨に祟られたが、半島海岸沿いの地域の雨の日の様子を体感できた、というべきなのかもしれない。また、歩行の多くが「みちのく潮風トレイル」と重なっていた。そして、かなりの部分が舗装され、県道2号線となっていて、大型のトラック等が通り、ちょっと危ない。だが、結論から言えば、細かいリアス式海岸の浜から浜へといく道は、とても興味深く、楽しかった。他の地域と比較すれば、箱庭に行くようにも感じた。峠道の森を見れば、フジ、ホウノキ、そしてキリの花が満開で、浜に出て漁港に至れば、それぞれの特徴を持った風景がある。島々の向こうには石巻の工

場の煙がうっすら見えるところもあった。漁港の木々には立派なフジがあったのも珍しかった。そして浦の全てに階段を登っていく神社があった。甚大な津波被害を被った被災地だったが、神社は津波を避けることができたのだろう。そして、仙台藩の歴史を実感できたのもよかった。

やはり、宮城県海岸地域を歩いた以上、東日本大震災に関連することを記しておく必要がある。牡鹿半島は初めて足を踏み入れるところだったが、高く聳える防潮堤、高台の防災住宅団地、海岸線近くの無人地域（災害危険区域）という三点セットは、ここでも見られる。15年という歳月ののち、ハードはなんとか一応の形を整え、牡蠣の養殖も戻りつつあるようだ。とはいえ、小学校閉校のモニュメントが複数見られることに象徴されるように、大幅な人口減は否めないようだ。民宿でも、若い人は地域外に出て行ったと話してくれた。漁業地域の過疎化は、この津波によって、大幅に加速された模様である。

素晴らしい牡蠣や魚、風土があり、外国人を含めて半島を訪れる人も多いようなので、これから、きっと新たな展開が待っているのだと思う。（弥生）

完